

シンポジウム

石牟礼道子と水俣が繋ぐもの 絶望と希望と

もうひとつのこの世の世を求めて



第一部

映像作品『水俣との出会い 2022』三浦淳子
音楽『不知火海のテーマ』他 吉田水子

第二部

【シンポジウム】
『石牟礼道子と水俣が繋ぐもの 絶望と希望と ~もうひとつのこの世を求めて~』
田中優子・有末賢・古川柳子・井上弘久



田中 優子

法政大学名誉教授



有末 賢

亜細亜大学教授、
慶應義塾大学名誉教授



古川 柳子

明治学院大学
文学部芸術学科教授



三浦 淳子

ドキュメンタリー映画作家



井上 弘久

俳優・演出家



吉田 水子

コントラバス奏者

2023年8月5日(土) 13:30 OPEN / 14:00 START / 17:00 END

下北沢 アレイホール

東京都世田谷区北沢 2-24-8 下北沢アレイビル 3F
TEL: 03-3468-1086

〈チケット〉投げ銭

(独演『樫の海の記』全国行脚公演の資金といたします)
※定員 60名(満席になり次第、締め切りといたします。)

〈要予約〉公式サイト: <https://www.tsubaki-dokuen.com>

MAIL ticket@mnhappy.com TEL 090-9846-1910 (井上弘久)

📺 ライブ配信を予定しています。詳細は、独演『樫の海の記』公式サイトに、後日掲載いたします。



難民の数が一億人を超えたという！
戦争が、内戦が、世界のあちらこちらで止むことがない21世紀。

一日で億を超える富みを得るものもいれば、今日を、明日を生き延びる食料さえ得られず餓死にいたるものもいる！

人間の世に望みはあるのか！？

ここに90余年前の水俣を描いた書物がある。
椿の海の記……山の神々が、川の神々がいて、猿やキツネやカラスたちとも共に生きる人々がいて、海辺の鄙びた寒村が近代的な町へと変貌を遂げようとする最中の情景が、4歳の女の子の眼を通して鮮やかに描かれて……
それこそ今は消え失せてしまった私たち日本人の源郷世界でもある。

水俣病患者たちに終生寄り添いつづけた石牟礼道子が作品を通して求めつづけたもうひとつの**この世**とは何なのか、それは**希望**の別名か。

第一部では、井上の舞台を撮影しつづけている映像作家・三浦淳子氏による水俣探訪記『水俣との出会い2022』を中心に、映像と音楽による水俣案内を。

第一部では、**独演『椿の海の記』**に注目くださった二人の識者に井上も加わって、石牟礼道子が作品を通して終生求めつづけたもうひとつの**この世**について、その**絶望と希望**について語り合いたいと思います。

井上弘久



〈パネリスト〉

田中優子 Tanaka Yuko / 法政大学名誉教授

江戸文学・江戸文化研究者で、エッセイスト。法政大学第19代総長。現在は同大学名誉教授。2020年に『苦海・浄土・日本一石牟礼道子 もたえ神の精神一』を刊行。女性ならではの石牟礼道子論は説得力に富み、危機的状況を生き抜くための希望を石牟礼道子の著作から導きます。



〈パネリスト〉

有末 賢 Arisue Ken / 亜細亜大学教授、慶應義塾大学名誉教授

専門は、地域社会学、生活史研究。著書：『生活史宣言』（慶應義塾大学出版会、2012年）日本生活学会会長、現在は、『生活とアート』『記憶とアート』などに関心を持っている。



〈パネリスト〉

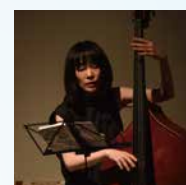
古川 柳子 Ryuko Furukawa / 明治学院大学文学部芸術学科教授（芸術メディア論コース）

専門はメディア論、マス・コミュニケーション論。人間の身体・技術・社会を繋ぐ媒介作用や「民人（たみびと）」の表現・発信活動の系譜などを研究関心領域としています。



三浦 淳子 Junko Miura / ドキュメンタリー映画作家

劇団転形劇場を経て、「トマトを植えた日」がイメージフォーラムフェスティバル大賞受賞。認知症で自分がアナウンサーだと妄想し、ひとりで放送する祖母を描いた「孤独の輪郭」。「空とコムローイ〜タイ、コンティップ村の子どもたち〜」と「さなぎ〜学校に行きたくない〜」など個人の体験に基づく映画を劇場公開。



吉田水子 Yoshida Minako / コントラバス奏者

東京藝術大学、桐朋学園大学研究科卒。躍動感あふれる伸びやかな演奏で、ラテン、シャンソン、タンゴ、映画音楽など、演奏と弾き語りでジャンルの垣根を超えて活躍している。「椿の海の記」の初演から音楽を担当。時に自身の作曲した楽曲も織り交ぜての演奏で、独演『椿の海の記』には不可欠のパートナーである。

<https://yoshidaminacoplanning.jimdofree.com>

撮影：宮内勝



井上弘久 Inoue Hirohisa / 俳優・演出家

1952年、東京生まれ。1979年より劇団転形劇場（太田省吾・主宰）に所属。名作『水の駅』『小町風伝』などで、日本および海外各地の舞台を踏む。1990年より劇団U・フィールドを主宰。構成・演出をつとめる。同劇団解散後、2013年より文学作品を一人で舞台化する「朗読演劇」を開始。2018年より石牟礼道子『椿の海の記』全十一章の連続上演を開始。三年をかけて全十一章の上演を果たした後、現在その全国行脚公演を遂行中。

撮影：スズキマサミ

石牟礼 道子 Michiko Ishimure / 詩人・作家

- 1927年 熊本県天草に生まれる。石屋の頭領である祖父・吉田松太郎の長女・春乃と松太郎の補佐役でもあった石工の白石亀太郎の間に生を受ける。生後数か月で水俣に移り、以後、その地で育つ。
- 1943年 水俣町立実務学校卒業。卒業後、代用教員（戦争による男性教員の不足を補った）の試験を受けて合格。16歳で、県下最年少の先生と言われる。
- 1945年 先生になって三年目、代用教員を再訓練するための助教養成所の授業で、宮沢賢治の『雨ニモマケズ』と出逢う。「限りなく心の自由を感じさせる言葉で、不思議な感動に満たされた。板書された文字のひとつひとつは、宇宙の中に定位した人間の叡智というふう感じられ、わたしはふいに元気になったのである」と、自伝『葎の港』に記している。それこそ『文学』との初の出逢いであった。
- 1952年 この頃より、短歌をはじめ。
- 1958年 谷川雁の「サークル村」結成に参加。
- 1965年 「熊本風土記」創刊号に『海と空のあいだに』（『苦海浄土』初稿）第一回を発表。
- 1968年 1月、水俣病市民会議を結成。
- 1969年 1月、『苦海浄土』を講談社より出版。熊日文学賞を与えられたが辞退。
- 1970年 『苦海浄土』が大宅壮一ノンフィクション賞に選ばれるも、辞退する。
- この時期は、水俣病支援運動の渦中、水俣病患者たちに寄り添うように、常に活動を共にする。

1973年 マグサイサイ賞（アジアのノーベル賞とも言われている）を受賞。

1976年 『椿の海の記』（朝日新聞社）刊行。

2002年 新作能『不知火』を東京で初上演。

2004年 新作能『不知火』を水俣で奉納上演。

『椿の海の記』刊行以後の活躍は受賞歴も含めて多岐多岐にわたるため多くを割愛するが、『苦海浄土』『椿の海の記』のほかにも、傑作と言われる作品は多く、『あやとりの記』『十六夜橋』『水はみどろの宮』『天湖』『春の城』新作能『不知火』など、愛読者でもどれが一番かと問われると、人によって見解が異なるほどの傑作ぞろいである。

その他、詩集、俳句、対談、エッセイ、どれを取っても、石牟礼道子ならではの世界が広がってゆく稀有の詩人であり作家であった。

2018年 2月10日90歳で永眠。水俣病患者たちに終生寄り添いながら、同時に、その一生を言葉たちと共に生き切ったのである。合掌。

全国行脚公演2023

独演「椿の海の記」

【北九州】カフェカウサ
2023年9月9日(土)/10日(日)

【熊本】熊本市国際交流会館
2023年9月16日(土)

【水俣】水俣おれんじ館
2023年9月18日(月)

【神戸】イカロスの森
2023年9月23日(土)/24日(日)

【東京】東京南青山 鏡仙会能楽研修所
2023年10月7日(土)

藤沢 / 調布 TO BE UPDATED

チケット申し込み
問い合わせ先

「独演 椿の海の記 ～もうひとつのこの世をもとめて～」公式サイト
<https://www.tsubaki-dokuen.com>

MAIL ticket@mnhhappy.com TEL 090-9846-1910 (井上弘久)



公式サイトはこちら▲